［第1回 公開研究会（ラウンドテーブル） 基調報告］

アフガニスタンの今

－市民のピースアクション－

発表者：平和村ユナイテッド代表

小野山　亮

ご紹介いただきました平和村ユナイテッドというNGOの小野山と申します。本日は、『アフガニスタンの今、市民のピースアクション』というタイトルでお話をさせていただきます。タイトルのとおり、私たちのような市民、NGO がどのように社会をつくり、お互い支え合うかという観点からお話をさせていただきます。

まず、活動その他についてパワーポイント等でのご紹介を差し上げる前に、先ほど来お話も挙げていただいている今回のアフガニスタンの急変の状況、本当に歴史の一ページになる変化でしたし、ご参加いただいている皆さまにとっても、それぞれ強烈なインパクトがあったかと思います。ですので、現場と直接やりとりや活動している人間として、そのときの様子、急変したときにどういう感じだったかというのを、市民の立場からお話を差し上げたいと思います。

この部分は、困難な中にも平和への行動という希望があることをまずお伝えしたいと思います。一つ目は、急変が起こったときの様子はどうだったかということに関していいますと、実は今回のこの急変の前に、若い方が特に主に発信されている SNS を通じたような市民による、戦闘とかその被害に反対する動きというのがSNSでかなり飛び交っていて、歯止めになっていたということを聞いています。戦闘当事者のほうも SNS というのはアクセスしていますし、一定の間は戦闘を食い止められることはできていたのではないか、ということを現地の方も言われていました。

実際、アフガニスタンといいますと、米軍、それからいろんな武装勢力ということばかり頭に浮かぶと思いますが、そもそもアフガニスタンでは、当たり前のことですけど、一般の人たちが住み暮らしているわけで、この人たちが当然ながら主役なわけです。ですので、そういった戦闘を止めたいという人たちの声が発信されていたということに関しては、

私自身としてはとても感銘を受けていました。

一方で、私たちの活動地は東部にあるジャララバードという大都市でして、アフガニスタンの首都カブールと、パキスタンの国境都市の拠点都市のペシャワールとかを結ぶ非常に重要な拠点都市です。首都カブール以外のほとんどの都市が既にタリバン支配下に入っていまして、このジャララバードは、ある意味、政府側にとっては最後の拠点都市という感じでした。ですので、私としては、かなり激しい戦闘が起こる可能性があるかもしれないというのは思っておりました。

そこで8月15日という朝を迎えました。関係者から、それから報道でも、朝起きてみると、既にこの拠点都市のジャララバードが戦闘なしにタリバン支配下に入ったということで連絡等を受けまして驚愕しました。そこまでの急展開というのは予想していなかったし、予兆もありませんでした。ですので、現地と直接やりとりしている人間としても、一晩、一夜で世界が変わったという印象を強く受けました。

私としては、こういうとき、当然ですけど、安全管理のこともあって現地といろんな連絡をするわけですけど、つながらないということもよくあります。ですので、そういうときというのは非常に不安に駆られますが、今回は、つながらないこともありましたが、比較的、現地と通信をスムーズにすることができました。ですので、そのときにどの当事者かによって通信が切られていたということはなかったと思います。逆に言えば、そういう意味では戦略上に、通信を切る必要がなかったのだろうなと思いますので、タリバンによる支配があっという間に進んだということは、そういったことからも分かりました。

私が現地の方たちと連絡したときには、町の中に既にタリバンのメンバーがいて、一目見て分かる戦闘員が普通に町の中にいるということで、人々は不安で家から出ないで、外出せずに家にとどまっているということでした。その後すぐ、首都のカブールもタリバンの支配下に入ったというのが8月15日の状況です。

その後に続く数日間、その後の人々の様子ですけれども、私は報道にも出たような大きな事件に、直接遭遇しました。まず、報道等でされているとおり、通りから人々が消えたというか、ほとんどいなくなったということ。特に女性たちは、ほとんどが家にいるということ。女性に対して、権利というか、どういう状況になるかというのは分からないので、皆さん、分からなくて家にとどまっていたという様子でした。

数日間、頻繁に現地と連絡を取っていましたが、実はある朝、その日のうちに何らかのデモみたいなのがあるようで、人が集まってきているという話を聞いていました。現地の方と直接、交信をしているときに、非常に音が大きくなってきて、今、話せなくなったので切らせてくれといって切られました。過去にもこういうことがあったので、すごく胸騒ぎを覚えました。突然近くで銃撃戦が始まって、たくさんの方が亡くなる、銃声とかも聞こえるような状況で、そういう交信をしたことが過去に私たちの経験としてあったので、音が大きくなってきて、ちょっと切らせてくれと言われたときは、かなり不安でした。

これは、後の報道で詳しく知りましたが、日本でもかなり報道されていました。タリバンの支配下に入ったときに、アフガニスタンの国旗をタリバンの旗に替えるというのが既に行われていましたが、それをさらに市民の方が元の国旗に戻したり、元の国旗を持って町中をデモするというのが起こっており、これが動画や報道の中で今でもたくさんウェブからアクセスできますが、その事件でした。

このジャララバードという都市でそのデモが起こったのは、アフガニスタンの独立記念日の前日でした。首都のカブールや、あと報道に出ていませんが、地方部でもこういった類似のデモがあったようです。そのとき話していた人と通信が切られたので非常に不安でしたが、その方は少しして、ここの場所は大丈夫だということで、また戻ってきて通信を始めました。

話している中で、今度はその方がまた別の事件のことをお話しされていて、報道はされていないけれど、色々なことが起こったのだと思います。その現地の方が言われていたのは、何らかの銃撃戦の巻き添えになって、小さな年齢の女の子が亡くなったと。そのことを話しているときに、突然、その方の顔がふっと逸れたんです。部屋の隅だけが映されたので何だろうと思ったら、その方が嗚咽されていて泣かれていました。本当にいたたまれない、大変つらい気持ちになりまして、大変なことが起こっているのだということをあらためて痛感した次第です。過去にも何度もこういうことを経験しているので、様々な事件が起こったとことがよみがえってきます。そのときにも、人の命が失われているということを痛感した次第です。

多くの方から今も聞かれますが、NGO の活動は、そもそも現地で有事の際にできるものなのかと言われます。実は活動は既に始まっています。NGO や市民の活動というのは求められていて、市民が必要とするサービス、寄り添う活動は欠かせません。戦闘地域では、戦闘当事者やその行政主体などが人道支援や何らかの活動をすると、政治的・軍事的な背景があるのではないか思われ、まとめにできない。ですので、人々に寄り添っている市民が活動せざるを得ないと言いますか、それしか方法がないということが多くて、それは今も一緒です。タリバン側としても、新たな統治をするということを今始めていますが、20年間のギャップの中で、急にそういうことができるのかは難しいので、NGO や市民が一緒に動かざるを得ない。

なので、完全に市民や NGO が何もできないということではなくて、そこは誤解を持たずに希望を持たないといけない。タリバン側とも協力して動いています。再開に向けた協議が始まりましたし、タリバン側にも NGO 側の管轄部署というのがあり、そこと協議をしながら進めています。特に緊急救援とか、教育や保健の分野だと許可を得やすいので、そこはタリバン側からの許可も得ながら、書面で許可を得るのはなかなか難しいのですが、始まっているということです。

ただ、一方で女性の活動には制限があり、困難はあります。地域に出るのが難しいというのが大きな課題です。しかし、活動自体が止まっているわけではなく、むしろ動いているところでは、受け入れられて進んでいるということは強調したいと思います。偏見、誤解は持つべきではないと思います。確実にどうしても必要な部分というのは、タリバン暫定政権とも含めて活動しているということは言えるかなと思います。

パワーポイントでのプレゼンの前に、最後に今後の課題ですけれども、これも報道されているとおりですが、戦闘と暴力は収まっていません。タリバンと、いわゆる「IS」を名乗る勢力が激しく対立していますし、たくさんの事件が報じられています。活動地でもそういった事件が起こっていて、市民の方も巻き添えになって死傷しています。それから、タリバンがほぼ全土に支配を広げる中で、いろんな勢力の人が今、一緒に住み暮らすようになっているので、いわゆる復讐というような事件が起こっています。タリバンも復讐を

禁じるというようなことを発言している、そういう状況です。

関係者や色々な人からの話によると、惨殺死体が見つかったということを聞いたりします。なかなか報道がないので、うわさではありますが、そのうわさの中で、惨殺死体がというようなことが上がっていて、私もいくつかのことについて現地から聞いています。

そういった暴力、戦闘というのは停止が求められるのは当然ですし、国際社会からも強く批判されています。タリバンの関係者がほぼ全てではなくて様々な人を含めた女性も含めた包括的な政府が必要だとか、さまざまな事項に関する市民の声、デモ、人権、女性の権利は当然ですけど必要で、それから先ほどおっしゃっていただいた人道支援に関しても求められるところではあります。

これまでさまざまな課題を力で解決し、それがまた暴力を呼び、復讐の連鎖が続いてきたというのは絶たなければいけませんので、この一番極めて大事な時期に、力ではなく対話で解決するというのを何とか、私たちも、国際社会も、タリバン側も進めていかないと、同じことが続いてしまうことと思っています。長くある紛争で特定の主体というわけではなくて、社会全体で力による解決、暴力の連鎖というのが続いていますから、社会全体が変わる必要があるというのが私たちの強く思うところです。

一方で、先ほど申し上げた SNS の発信であるとか市民の活動、デモ活動という、既に変化があるわけです。そこはこの後の活動紹介のほうでも申し上げたいと思います。市民の声といってもたくさんの声がありますが、でもそうあってしかるべきだと思います。大事なことは、社会全体が力ではない方法で声を上げたりしていくことです。少なくともそういう人たちがいます。なので、そういう人たちをサポートする必要があるだろうと考えています。

私たちの活動の中では、以前、過激な思想を持つ人間だったけれども、活動を通して変わったという人もいますし、地域の人々が一緒に活動する中で、争っていたグループが争いを解決したという事例も出てきています。地域とか家庭での争いが、大きな紛争や武装勢力も含めた大きな争いにつながることもあるので、社会の中での暴力をなくしていくというのが、これからも引き続き求められます。私としてはこの冒頭部分をまとめますと、困難な中にも平和への行動という希望はありますので、それを外部である私たちも支えていかないといけないということかなと感じています。

では、ここからパワーポイントでのプレゼンをしたいと思います。『アフガニスタンの今、市民のピースアクション』というテーマでプレゼンをさせていただきます。

まず、私たちが経験してきたことということで、こちらは市民が犠牲になる自爆攻撃の後の写真です。鮮血が付いた服を着ているこの方は地域指導者の方で、私たちも親しく活動を一緒にしていただいていた方です。実はこの扉の向こうで、その事件で負傷されていたお孫さんが手術を受けていましたが、この後亡くなられたそうです。こういう事件が私たちの身近でこれまでも続いてきました。

これも襲撃事件のときに人々が恐怖で逃げるときの写真です。こちらは自爆攻撃の後の写真です。こういった経験をたくさんしてきまして、現地の方もそうですけれども、私もこれまで何度も泣きました。耐えられないようなたくさんの事件をこれまでも経験してまいりました。

こちらは、父親の復讐について語った兄弟です。地域で、何になりたいか聞いていると

きに、この子たちは殺害された父親の復讐を語ったのです。非常につらい、こういうまなざしをしていて、何らかの爆破事件でお父さんが亡くなったということで復讐を誓っているということでした。私たちとしては、こういった暴力の連鎖というのは何とか止めたいという思いです。力ではない物事の解決方法はないのかということをずっと模索して実施しています。

ここで、実際に力の信奉者であったが今は平和の活動をしている方についてご説明いたします。『私が銃を捨てたわけ』というタイトルにしています。力に憧れた青年時代、武力こそが解決策だと思っていた。青年時代はこういう、先ほどの復讐を誓う兄弟のように、周りに力と暴力があふれている世界で、自分自身も武器を取って力で物事を解決しようという生き方をしていた青年時代だったそうです。この人は実は、今、私たちが活動しているアフガニスタン側のパートナー団体の代表の人、サビルラさんといいます。

このサビルラさんが、なぜ銃を捨て平和活動を始めたかといいますと、まずドライバーとして、生活のために、人に紹介されて NGO で働き始めました。そこで、米軍による市民の被害に対して NGO が抗議をする場面に遭遇します。何らかの米軍の誤爆だったり軍事演習で市民が亡くなったりしたときでも、NGO は当然ながら復讐をしたりはしません。それはおかしいということで抗議をしたりするわけですけれども、彼としては、力によらない解決方法があるのかという気付きがあり、最初は懐疑的だったそうですが、次第に「なるほど、武器で復讐ではないんだ」と。そして自分自身もこういった抗議活動を始めたということです。実際に軍事演習と言っているもので、市民に被害があったときに、砲弾の破片などを集めて米軍に抗議するようになったそうです。彼が働き始めた NGO というのが、私も前職で働いていた日本の NGO「日本国際ボランティアセンター」JVC という団体です。そこで私も彼と出会いました。

彼のこういった経験を踏まえて、今、活動を始めているのが『アフガニスタン・ピースアクション』という活動です。彼の気付き、自分が変わったという経験から、人は変わることができると。きっかけが必要なので、何らかのきっかけを得て身の回りからできることをしていこうという活動です。大きく二つ活動の柱がありまして、まず一つ目は「平和と非暴力の学び合い」です。サビルラさんが変わったように、過去の自分とか、村や家庭で起こった暴力をみんなで事例共有し、何か他にいいやり方があったのではないのかということを話し合うという事例です。こういうきっかけによって、サビルラさんが変わったように、皆にも変わってほしいということです。

そういった学び合いを踏まえて、自分の地域や家で出来ることをみんなで話し合い、自分たちが思う平和のためのアクションをやってみようというのが二つ目の柱になります。これが学び合いの様子ですね。色々な方々がいるのが分かるかと思いますが、私たちから参加者に、どういう思想だとかを聞くことは当然ありません。もちろん、参加者たちも、自分のアイデンティティーやどういう考え方だとか、そういったことを言うこともありません。ただ、この地域では、今もそうですが、様々な勢力が入り乱れて戦っていた地域ですので、色々な背景や思想の人が集まっているのは間違いないです。こういう人たちが集まって、地域のもめ事や争いについて、何か良い方法はなかったのかと話すこと自体が非常に重要なアクション、場だと思っております。

長老のような地域指導者たちも参加をしています。大体は後ろのほうで聞いているので

すが、子どもたちもいます。学校の中の暴力の話なども提起されたりするようになっています。ですので、このような場は非常に大事なのではないかなと思います。先ほどの兄弟の例のように、子どもたちが復讐を誓うということもあるような社会の中で大事なことだと思います。

今も言われているように、女性の活動や権利について非常に厳しい活動制限がある中ですが、ここにあるように、女性たちも家や地域の中の平和の問題、平和に暮らすということについて話し合ってアクションをするという活動をこれまでもしてきました。特定の主体が女性の権利を制限しているとよく言いますけれども、そういう考え方は少し違っていて、広い社会の中で女性の権利制限が厳しいです。暴力も本当にたくさんあります。ですので、社会全体で暴力を無くしていく、権利制限を無くしていくという考え方を持たないと一面的ではないかなと考えます。

首都のカブールとかで、女性の権利を求めてデモをする女性たちを見ていて、特定の女性たちがやっていることだというようなことを言われる方がいらっしゃいますけど、それも違うと思います。というのは、ここに今お見せしている写真は、本当に地方部の農村部の女性たちです。この活動だけではなく、女性たちが集まって活動する中で、こうやって集まってみんなで活動できるということが本当に幸せだとか、この活動によって自分たちのために今後も活動していきたいというような、喜びがあふれている話を、私たちは何度もこれまで見聞きしてきました。女性たちの中にも、もちろんいろんな考え方の方がいらっしゃる。それは間違いないです。特定の女性たちが女性の権利を先鋭的に主張しているというのは違うのだと思います。そこは外にいる私たちも意識して、一面的ではない見方をしていかないといけないと考えます。

こちらが今の学び合いのときに使う教本のようなものです。これもわれわれが分かるように英語にしてくれていますが、「ピース」という言葉をダイレクトに使うのがすごく難しいです。というのは、例えば米国とか外国の敵に対して聖なる戦いをしているのだという人たちがいる中で、平和ということを言うと、戦いをするのはおかしいというのかといわれたり、敵対してしまったりしうるという難しい状況があります。そのため、少し小賢しいかもしれないですけど、大事な点で『ピースフルライフ』というような言い方をして、平和な生活をつくるための活動なのだという、そういう言い方をしてこれまでも活動を進めていました。この教本の中には、先ほど言ったような身近な話し合いの仕方の例とか、やり方やモラル、コミュニケーションの仕方みたいなことを教本として盛り込んであります。

今のような学び合いを踏まえて、地域の人たち自身が考えて行うアクションについてご説明します。地域の人々自身の発案、実施です。毎年、話し合いの後に何を行うかは住民の人が決定するので、私たちとしては何が出てくるのか楽しみでもあります。

まず一つ目、戦争遺児のサポートという活動です。こちらは、先ほど、いろんな勢力の人たちがいる中で、復讐とか暴力の連鎖が続いてしまっているということをお伝えしました。ここにいる子どもたちには、さまざまな戦闘員の父親を持つ子どもたちもいます。父親を失った戦争遺児たちです。なので、ある子どもの父親はこちらの勢力、この子どもの父親はこちらの勢力ということで、もしかすると父親同士が同じ地域の中で、敵味方で殺し合っていたような関係にあるかもしれないという状況です。ですので、父親たちが敵味

方に分かれていたかもしれないけれども、子どもたちは一緒に色々な活動するとか、あるいは負っている深い傷をいやし、支える、復讐があるような社会から守るというようなことが非常に大きなピースアクションでして、それを地域の人たちが組み立ててやったのが、この去年行ったアクションです。この一つをご紹介したいと思います。これは動画ですが、子どもたちにぼかしをかけたりしているのと、録音、録画の関係から途切れ途切れになっていますけれども、流したいと思います。

美しい自然と子どもたちの声に最後はホッとしますが、ここはものすごい激戦地になった所の一つです。

もう一つ、戦争中に廃れてしまった文化やスポーツというのがあって、一部の文化は乱れているということで一定の勢力から攻撃を受けたりするような状況もあります。戦争の間、余裕もなく、全く行われなかったスポーツを復興させるということで、地域で平和な暮らしを感じることができるよう、これも地域の人たちが考えた活動です。これをやっているときに、すぐ近くで戦闘が行われていたようでして、爆発音とか銃声が聞こえていたらしいです。それでも集まって、人々が平和な暮らしを楽しんだということで、人々がどれだけ平和を欲しているかよく分かるというのを現地の人が言われていました。私自身も暗いニュースに接する中で、歓声を聞いて本当にうれしかったです。子どもたちが木の上から見ています。これも動画があるので、取組を一つお見せします。

これはアフガニスタンですからね、アフガニスタンでこういう平和な生活を作ろうとしている人がいるということに、私自身はすごく励まされました。他にも、右上のほうの写真で分かるように、町の中で平和を訴えるバナーを持って練り歩き、その後、走って競争するというイベントを行っています。このイベントで実は対立していたグループが、争い事を解決したというのを後で聞いています。

先ほど教本をお見せしましたが、それとはまた別に、地域で本を買い、平和に関連する

ことが書いてある本を読んで学び合う、議論するというアクションです。このアクションは唯一、女性の参加が可能でした。ただ、リーダーたちの近親者の女性に限られていたということで、やはり女性が集まることは難しい状況です。今後も続いていけばいいと思いますが、今はどういう状況になっているか、止まっているのではないかなと思います。これは本を買っているので、コミュニティーライブラリーのような形にして持続的に行っていくことができる、より容易な活動にはなっています。

こちらは今年の 4 月ぐらいにあったアクションでして、既に戦闘が激しくなっていました。毎年春ごろに、雪解けとともに激しい戦闘が起こります。その時期に、平和をシンボリックに訴えるというアクションが非常に大事だということで、これは木を植えて、ここに平和公園を造ろうというアクションです。これも色々な人が集まってやっているということだけで非常に大事なアクションなのですが、平和公園になった暁には、そこでいろんなピースアクションをやるということでシンボリックな活動として実施しました。

こちらでお見せしているのは、（激戦地の）トラボラです。大変画期的で、トラボラに平和公園を造っているということだけで私は非常に感動しました。ただ、この場所は、私たちの活動地の中で真っ先にタリバン支配下に入ったところです。植えたのが 4 月、5 月ぐらいだったですけど、6 月、7 月ぐらいの早い時期にタリバンの支配下に入っています。先ほど申し上げたように、シンボリックな平和の意味がある場所ですので、当事者にはそれを伝え、みんなが一緒にやる活動の重要性を分かってもらい、近隣の人が運営をしていく体制にしています。今後もここはシンボリックな平和の意味を持ち続けることを私たちは望んでいて、そういうふうにしていくつもりです。

これは、ピースアートといって、子どもたちとか青年たちがアート、銃を壊している絵などが描いてありますけど、これも絵の意味を皆さん発表して平和について議論するアクションです。

こちらがアドボカシー研修といって、声を上げられない人たちのためにも、SNS なども使い暴力への反対や、平和を訴える活動をできる人がやっていこうということを学び合うアクションです。これも、SNS の発信も多くの人がやっていますし、プロパガンダとしても使われていますから、リスクとかも含めて話し合って学び合います。

最後に、この急変を受けて、われわれが今やっている活動です。先ほど動画でご紹介した、戦争遺児の子どもたちに寄り添うアクションを、緊急アクションとして新たに始めました。そちらについてご説明します。このアクションに至る経緯ですが、冒頭のほうで申し上げたように、新たな暴力や復讐の連鎖があると。同時に人道危機、経済的困窮が激しいということがありまして、特にこういう戦闘で父親を失った子どもたちは、精神的にも経済的にも大きな影響を受けています。申し上げたように、この子どもたちはさまざまな背景を持っています。一般市民の父親も含んでいますけれども、敵対するさまざまな主体・勢力の父親も含んでいます。先ほど申し上げたお父さんの復讐をしたいということを誓っていた子どもたちのように、暴力の連鎖が強い環境から守りたいということです。

急変の後に子どもたちに接してみますと、こういう戦争遺児の子どもたちには全く笑わない子どももいるということとか、3 日間何も食べていないといって、目に涙をいっぱいにためて近くに来る子どもたちがいます。戦争遺児の子どもたちも非常に数が多くて、皆さんに参加してもらうことはできないので、何とか皆さんの協力の下にやっていきたい。この 3 日間何も食べていないという子どもは、残念ながら活動の参加者として迎えることができませんでした。私たちのキャパシティの問題です。なので、他の団体とも協力していきたいとは考えています。

活動の概要ですが、まずは生活困窮ということで食糧費を配布するということ。それから、子どもたちに寄り添うピースセンターの設立と運営です。生活支援、平和の学び、精神的なサポートを通して寄り添うという活動をしています。身近に暴力がある環境とか精神的な苦しみ、生活の困窮から守って、平和な暮らしができるようにするということです。さらに、それによって暴力が身近にある環境自体を無くして、平和をもたらすということにも寄与したいと考えています。

子どもたちについて具体的に個々のストーリーを聞くと非常につらくて、例えば結婚式に参加していた父親が、その結婚式を狙った自爆攻撃で亡くなって、その子どもが、今回の活動に参加しているとか、父親が暗殺された例があります。子どもによっては、村の人の中にはいろんなことを悪く言う人たちとかいて、非常につらい思いを抱えている子どもたちもいます。生活困窮の状況は本当に厳しくて、兄弟が薪を拾ってロバで運んでという状況とか、それから借金をしてという家族もいます。そういった子どもたちがそれぞれ厳しいストーリーを抱えています。

生活支援のための現金配布は既に始まっていて、食糧費配布ですけど、配ったときの子どもと関係者の笑顔が非常にわれわれもうれしいです。この活動関係者は、先ほどご紹介した銃を捨てて平和活動を始めたパートナー団体の代表のサビルラさんです。

ピースセンターの活動は既に始まっています。文房具と教科書を配ったりして、平和教育、一般教育、それから子どもたちに寄り添う活動をしています。屋根がないセンターも一つあります。地域の人の建物を借り上げて活動しています。5 カ所あります。

そこにある希望ということでお伝えしたいのが、何度も申し上げているように、父親た

ちが殺し合うような関係にあったかもしれなくても、今、子どもたちがどんな背景があっても一緒に活動しているということが非常に大きな希望です。この活動自体も村の人たち、それからタリバンの暫定政権も許可をして、協力してやっている活動です。ということは、タリバン暫定政権も、市民も、私たち活動している団体も、お互いに共生して住み暮らすということを将来あるべき姿だと思って活動しているわけです。

ですから、未来に希望を持って、暫定政権も、地域の人も、市民団体も、みんな協力して今活動していますから、それは大きな希望だと思います。この活動自体を組み立てるのも、現地にいる市民の人たち自身です。皆さんが発案してやっている活動ですから、私はそこに希望があると感じています。

最後に、武器を捨てて平和活動を推進しているパートナー団体のサビルラさんの言葉をご紹介しますと、「今回のこの活動に参加する 150 人の子どもたちが、他の人たちの心を変えることができると信じています」というふうに彼は言っています。「この子どもたちが他の人たちにとってシンボルになりえるのです」と。これは、先ほども何度かお話が出たように、支援の在り方ということにも絡むかなと思います。こういう状況の人たちを哀れみの対象とか、客体とするような見方しかされないこともあります。でも、それは間違っている。というのは、サビルラさんが言うように、この人たち自身が今、活動を現地で作ろうとして頑張っていて、この子どもたち自身もサビルラさんが武器を捨てて平和活動をしているように、この活動をきっかけに、今度はこの子どもたち自身が平和の活動、国や地域を作っていく人たちになっていく。ですので、武器を捨てて平和活動して、自分が変わってこの活動をしているサビルラさんなりの素晴らしい言葉だと思いますが、本来は当たり前のことです。

ここにいる子どもたちが今後、希望になるということに私自身もすごく大きな希望と力をもらっていて、日本にいる私たち、アフガニスタンの外にいる人たちも、現地の人たちが主役になって変えていく、作っていく社会をみんなでサポートしていく。サポートというよりも連帯して一緒に活動するという考え方でやっていくべきではないかと考えています。

日本もアフガニスタンのような状況を経験しているわけです。特に外国からの侵入のようなものに対して国が極端に固まったり、非常に過激になったりした。それでまた対立してもめたりすることは、それこそ幕末の激動を日本人は経験しました。女性に対する男性の見方、抑圧も、構造自体は全く一緒です。そういう意味では、アフガニスタンが極端だというようには捉えずに、おっしゃっていただいたように、日本のこれまでの経験、アフガニスタンの経験、お互いに経験交流しないと、全く違う世界の人たちの全く違う出来事だということになってしまう。そこは経験共有を世界でしていくべきだと考えています。なので、ご指摘もいただいたとおりで、お互いの交流、学びを進めたいと私は考えています。

以上、本日は市民による行動、希望というところを主にポイントにしてお話をさせていただきました。みんなで一緒に、ということでともに平和をつくりましょう。われわれの活動もなかなか厳しいところがあり、ぜひホームページからユナイトしていただいて、お力添えをいただければと思っています。ありがとうございました。